

**学びをつなぎ、未来を拓く児童の育成**  
 ～ひと・もの・こととのかかわりを通し、自ら問い続ける学習～

1 研究の概要

(1) 研修主題について

本校は、全校児童17名の小規模校である。幼少期から同じメンバーで過ごしているため、児童同士の結び付きは強い。生活の中では、互いに遠慮なく自分の考えを伝えられるというよさがある。学習の場面でも「リーダー学習」に馴染み、リーダーの進行に従って、意見を述べたり、聞き手はそれをしっかりと聞いたりすることができる。これまでの研修での取組により、様々ななかかわり合いの中で他者の意見に触れ、考えに広がりが見られるようになったものの、一人ひとりの考えが深まったかどうかについては課題となっていた。本年度も、本主題で研究を継続することでめざす児童像の実現に取り組んだ。交流を仕組む場面とそうでない場面をどのようにプランニングするとよいのか、また、学んだことを児童が発信するにあたり、誰に対して、どのようなツールを用いると効果的か等、昨年度に増して単元構想をきめ細かく見つめ直すことで、課題解決に迫った。

学習の過程で、児童は様々な場面で学習材への問いや、課題解決に向けた一人学びの場面での自分自身への問いや、共学びの場面での仲間の考えへの問いをもつ。児童は問いに対する答えを見つけようと試行錯誤する。問うことをやめてしまうと、学びの浅い時点で得た未熟な考えしか表出できないが、問い続けることで考えは深まる。特に、共学びの場面では、自分の考えを述べただけで満足したり、仲間の考えを聞き流したりするのでなく、相手意識をもち、問い続けることができれば、考えを深めることが可能になる。児童が問い続けることができるよう、一人ひとりの児童理解はもとより、発問、指示、声かけ、教具、場の設定等、東荷小の実態に即した授業のしかけを追究してきた。

今年度も引き続き、複式学級ならではの授業の在り方について研修を深め、指導方法の工夫・改善に努めた。本研究により、児童がこれまでに習得した力を自覚し、それを活用しながら新たな学びへとつないで課題を解決し、一歩先の未来を拓いていくことを期待して実践を積み重ねた。

2 研修主題解明の視点

(1) 学びを深める学習過程の充実

- ・主体的にひと・もの・こととのつながりを求めるための工夫
- ・他教科等や領域と関連を図った単元や授業の構想

(2) 学びをつなげ深めるための工夫

- ・自他に問う場の工夫
- ・課題設定、発問の工夫
- ・複式学級における授業づくりの工夫
- ・ICTの活用



3 研究の実際

(1) 1, 2学年 生活科「もっとすきになりたいな キラキラタウンつかり」

- ・主体的にひと・もの・こととのつながりを求めるための工夫

授業づくり熟議により、保護者や地域の方とともに授業の構想について熟議した。地域を紹介するガイドブックの作成には、地域の方が取材場所を申し出たり、東荷の郷土料理を紹介したりしてくださることで、児童が本物とのかかわりの中で学習する機会を得ることができた。

また、本時の前に、児童は地域のぶどう園で育ったぶどうを試食した。児童は、五感を働かせながら、文章のモチーフを獲得していった。そこで、読む人に伝わる文章を書くように指示を出し、書くことへの抵抗感を軽減するなどの理由により制限時間も設定して文章を書かせた。書く活動がスタートすると、普段は書き出しに時間がかかる児童でさえ、勢いよく書き進めていった。これは、実際にぶどうに触れたり、食べたりした直後だったからだと考えられる。五感を通して素材とかわることで、書くことへの意欲が増すことが期待できるのならば、生活科等と連携させ、体験を通して書くことができるよう単元を構成することが効果的であると考えます。

本時では、2名分の作文の推敲をゲーム化して行った。自分以外の人が書いた作文の推敲となると、関心が薄くなってしまふことが予想されたため、見つけた友だちのよさに対してシールを貼る活動を仕組んだ。すると、途中からシールを早く消化することに児童の目的が移行してしまった。質の高いかわりが期待できると考えて取り入れたゲーム化であったが、参加する児童の特質をふまえ、設定を練り上げることが大切であった。

#### ・他の教科や領域と関連を図った授業の構想

本単元は、主に生活科と国語科を関連させて学習を展開していった。そのように学習を進めることで、児童が紡いだ文章は、ふるさと東荷のよさを発信するガイドブックになった。成果物ができたことで、児童は自分らしく地域貢献できたという満足感が得られる。実際に、ガイドマップを読まれた方から児童の心情表現についてほめてもらったり、保護者から「楽しく書いたことが伝わってきました。読んでいるわたしも、楽しかったです。」と言ってもらったりすることで、研究の成果を実感することにもつながった。

さらに、ガイドマップを作ったことをきっかけに、「東荷かるた」を作りたいという機運が高まり、実際に作るようになった。このように、広がりをもつ活動は、主体的な学習姿勢を期待できるのではないかと考える。

#### ・次年度へ向けて

本単元キラキラタウンつかりの全体像は、今回の学習のように、本校単独で実施できるパートと、塩田小学校と合同で実施するパートによって構成されている。2校の担任間で令和5年度の活動計画について話し合った際、次年度も、交流できる場所は積み重ねていくとよいということになった。交流を通しての活動をもとにすることで、さらに、かわること・発信することの質的向上をめざしたい。

## (2) 3・4学年 総合的な学習の時間（東荷学） 「受け継がれる東荷神舞」

### ・主体的にひと・もの・こととのつながりを求めるための工夫

昨年度に引き続き東荷神舞を未来へ継承していくことをテーマにして学習に取り組んだ。今年度は、周南市立和田小学校と交流を行った。和田地区には、伝統芸能である三作神楽が受け継がれている。神楽と神舞、共通する部分がある二つの伝統芸能を題材に話し合った。

本時では、互いに伝統文化を未来へと繋げていくための手立てについて意見を出し合うことに主眼をおき、オンラインで繋いで話し合い活動を進めていった。

それぞれの学校で伝統文化がどのようにして地域に伝わってきたのか、地域の方がそれぞれの神楽についてどのような思いをもっているのかを、予めインタビューしてきたことにもとに伝え



3,4年の授業の様子

合った。その中で、児童は自分たちの地域に伝わる伝統芸能のよさや、かかえている課題を改めてつかむことができた。互いの意見や考えを聞くからこそ、クラスでの話し合いでは気付くことができなかつた新たな見方や考えが得られた。それゆえ視野が広がり、本時に向けて意欲が高まった。

また、本時では、それぞれの伝統芸能を未来へと残していくための方法について話し合った。お互いの取組の中から、新たに取り入れられそうなことを見つけるための話し合いでは、多様な意見にふれることができ、とても有意義な時間となった。和田小には、広く知らせるためのパンフレットや地域の伝承館があること、多くの人に見てもらおうことのできる場所でも披露する機会があることなどを聞いた。児童だけでなく、授業を参観していた地域の方にも、東荷神舞を未来に残していくための考えを広げるヒントとなった。

・次年度へ向けて

今回の授業では、離れた学校同士の意見交流をオンラインで行った。住んでいる地域が違っていても、互いの伝統芸能について調べ、思いを語り合うことで、互いの地域や文化に興味をもち、児童一人ひとりが主体的に学習に取り組むことができると感じた。

オンラインで交流するにあたって、ホワイトボードを画面に写したり、学習支援ソフトを活用して作成した資料を画面共有して発表したりするなど、場面に応じハイテク・ローテクを駆使した。ハード面の不具合により授業が中断することもあった。児童の思考の流れを妨げないためにも、実施する学習内容に即した機器の導入や、さまざまな事態にフレキシブルに対応する教師の技量を高めるための研修が望まれる。

また、話し合いの場において教師がファシリテーターになっていた場面も多かったため、児童主体で話し合いを進めていく力をつけていくことも必要であると感じた。そのためには、交流学习の時だけでなく、日常の授業からの積み重ねを大切にしていきたい。

### (3) 5, 6 学年 総合的な学習の時間 (東荷学) 『伊藤公マイスター』を目指そう」

・主体的にひと・もの・こととのつながりを求めるための工夫

5, 6 年生では、昨年に引き続き「伊藤公マイスターを目指そう」をテーマに、郷土の偉人である「伊藤博文」について学習に取り組んだ。複式学級の特性を生かしての2か年計画で、今年度は「政治家伊藤博文」に焦点をあてて学習を進めてきた。政治家伊藤博文には、賛否の分かれる部分もあるため、今年度は「伊藤公が政治家として活躍した要因」をテーマとして取り上げることにした。幼年期、松下村塾熟成期、イギリス留学期、倒幕運動期、そして内閣総理大臣期と大別して、伊藤公が「大日本帝国憲法」を起草した時期までを、「立志編」として探究した。

また年度当初より、塩田小学校の児童とオンラインや直接交流も計画的に進め、人間関係の深化に努めてきた。今年度は、2校で総合的な学習の時間の共通題材として「伊藤公」を取り上げ、それぞれの学校の学習成果を持ち寄って、「伊藤公サミット」を開催することにした。2校が伊藤公を調べることで、よい意味での競争心が芽生え、相手の存在を常に意識した取組となった。固定された関係性の中で過ごしている児童にとっては、他校の児童に伝える、しかも同じ学習課題に取り組んでいる相手に納得してもらえるように伝える、という学習は、とても緊張感をもって取り組めたのではないかと考える。グループに分かれて発表したことで、一人ひとりが自分の考えを言葉にして相手に伝えるという責任を負う活動となった。友だちの発表に対し、その場でコメントを伝えるという活動を仕組んだ。相手の発表をしっかりと聞き取る、そして即興的に自分の考えをまとめるという、日頃の学習以上の真剣な姿が見られたことも、うれしい成果であった。

### ・学習成果を生かした発展的な学習

伊藤公サミットでは「伊藤公が政治家として活躍した要因」として、児童は「伊藤公のイギリス留学が大きな影響を与えたのではないか」という考えを発表した。さらに保護者や地域の方に、自分たちがまとめた学習の成果を11月に行われた「東荷ふれあい文化祭」で、「長州ファイブ物語」と題して創作劇を披露した。教師がおおまかな展開を考えたが、児童がそれぞれの場面に合ったセリフを考えていくなど、主体的な取組が見られた。また、イギリス留学での伊藤公の姿勢にも共感し、伊藤公の行動力や英語の習得など、自分のこれからの学校生活に生かす指針として、サミットの「共同宣言」にまとめた。それを受けて、年度末には英語でのスピーチ「東荷版日の丸演説」を実施し、具体的な実践につなげる予定である。この経験が自信となり、今後の学習への意欲の原動力になることを願っている。

### ・次年度に向けて

保護者や地域の方を巻きこんでの学習展開は、今後の授業づくりに大いに参考になるものであった。コミュニティ・スクールとして、保護者や地域の方の意見はもちろん、児童の意見も取り入れながら、学校づくりに生かしていく熟議が盛んに行われている。この伊藤公を題材とした「伊藤公サミット」において、児童と保護者や地域の方が意見を交流させることは、正しく3者による協働的な学びになるのでないかと思う。ぜひ、来年度の授業づくり熟議において、児童、保護者、地域の方を交えて授業構想をつくり上げたいと思う。

さらに今後は交流を最終目標とするのではなく、交流した学習成果を新たにアウトプットする学習につなげていきたい。意見の中にあつた伊藤公資料館によるガイドなど、地域の教育資源を最大限に生かしたものになるであろう。そのためには、様々な人との交流から、自分たちの知らない伊藤公の別の側面にも触れることが大切だと考える。単元計画にぜひ取り入れていきたい活動である。今後の学習の可否を決めるのは、多くの関係者との授業づくりの方向性を同じにすることだと思う。

## 4 研究のまとめ

本年度も、生活科・総合的な学習の時間の単元構成の作成、授業づくり熟議、授業案検討、授業公開、という流れで行うことで、研修の充実・深化を図っていった。その中でも、学校運営協議会委員や保護者とともに、小中一貫教育やまと学園のめざす子ども像を共有しながら行った「授業づくり熟議」は、「社会に開かれた教育課程」の実現のためにも大変意義深い取組だった、と捉えている。地域や家庭の学校教育への理解・協力を得るとともに、「学校・家庭・地域の3者が子供を育てる」という参画意識も高めていくことができると考える。今後も、これらの研修サイクルを継続しつつ、さらに児童の実態やめざす子ども像をふまえた児童が身に付けるべき資質・能力を明確にしながら、よりよい研修を行っていきたい。

また、本校は複式教育を行っていることから、複式教育において児童が「自ら問い続ける」ことができるような学習力をどのように付けていくのか、についても研修を深めていきたいと考えている。

東荷小児童が劇「長州ファイブ物語」  
“令和の東荷ファイブ”  
英国での集合写真をまねてポーズも

今日の紙面より 光高野球場の快進撃を支えた「子陣」  
文化祭の発表は、6年生から1年生まで、英語で、東荷出場の伊航・留学し、帰国後、披露文について学んだ。今年、6年生は「イギリス」で政治として活躍で「留学」して、160年「きたか？」と考えた。

「長州ファイブ」の集合写真  
近世日本工業の父・山田重三  
近代製糖の父・伊藤博文  
近代製糖の父・伊藤博文  
近代製糖の父・伊藤博文  
近代製糖の父・伊藤博文

「瀬戸内タイムス」令和4年12月2日から